

暖冬とはいえ、寒さと乾燥が続いています。インフルエンザの流行も最小限に食い止めたいものです。ご家庭でも、手洗い、うがい、十分な睡眠、偏りのない食事など、健康管理にご協力ください。

多くの機会はありませんが、子どもたちに向けてお話をすることがあります。できるだけわかりやすくしようと心がけるのですが、伝えたいこと、思うことが山ほどあってどうしても長くなってしまいます。毎日の授業での教員も同じ思いでしょう。伝えたいことが伝わっているのか不安です。でも、何度も何度も伝え続けていこうと思います。



## ❖ 「言の葉」 子どもに伝える

話し言葉、書き言葉、ていねいな言葉、誠意のある言葉、言葉にはいろいろな装いがあります。現代では、SNSなどの普及で、言葉の「重要性」が大きくなってきています。

かつて「言葉」を「言の葉」と読むことがありました。「葉」のように風に舞い、水に流れ、光を浴び、雨を受け、そして土となる、「言の葉」にもそんな姿が重なります。

「言の葉」は、西暦 900 年ごろに編纂された「古今和歌集」の序文において、「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」と記されており、和歌が心から生まれるものであることを、植物の葉が種から生まれることになぞらえたことから言われるようになったと考えられています。

なお、「万葉集」の語源は諸説あり、どれが正しいのかはわかりません。「万葉集」は前述の「古今和歌集」より 150 年ほど前に編纂されたものであり、上記のなぞらえとは関係がありません。

もともと「ことば」という語は「こと(事) + は(端)」から来たと考えられており、「葉」との直接のつながりはないようです。

先日、女優五大路子さん(横浜市港北区在住)の朗読劇を拝見しました。『真昼の夕焼け』と題されたこの朗読劇は太平洋戦争終末の横浜大空襲の惨状を表している作品です。横浜の小学生にも伝えられる「朗読劇」として構成された内容は、私たちの地元・横浜であった「戦争」を伝え、「平和」について考える機会に一との願いが詰まっています。作品中には、東神奈川駅前、六角橋、子安、東寺尾など、耳なじみのある地名が出てきます。色、匂い、音を思い浮かべながら朗読の世界に引き込まれていきました。

「言の葉」、わたしの口から出る「言葉」も同じように、影響力があるのだと改めて感じました。

今生きていること、平和であること、大切にしたいこと…は一番近いことを大切にすることもかもしれませんね。

## ♠ 「心を交わす」 あいさつのすゝめ

- 「おはようございま〜す！」→(あれ?今日は声がかすれているぞ?)「大丈夫、風邪?」→「なんか調子が悪くて…。」→「気分が悪くなったら保健室に行ってね。」→「は〜い、今日、家に帰ったら病院行きます。」
- 「先生、さようなら。」→(今日は疲れたでしょう…。)「お疲れ様。また明日学校に来てね。」

交わすあいさつは、相手を認めている大切なシグナルです。あいさつがなかったり、あいさつが返ってこなかったりすると<私のことを気に留めてくれないのかな?>と不安になります。だから心のバリアフリーなんですね。

- ◆ 「ありがとう。」「どういたしまして。」は互いの行為に対する感謝と敬意。
- ◆ 「行ってらっしゃい。」「行ってきます。」は道中の安全を願う気持ちとそれに対する感謝。
- ◆ 「さようなら。」「また明日。」は今日の別れと明日の希望のやり取り。